

神戸建築学 第 37 回

「マイクロデュレイションについて」

原 広司

建築家・東京大学名誉教授



原 広司 |Hiroshi Hara

建築家、東京大学名誉教授。

59 年東京大学工学部建築学科卒業。

64 年同大学数物系大学院建築学専攻博士課程修了。工学博士。70~98 年設計活動をアトリエ・ファイ建築研究所と共同し、99 年原広司・アトリエ・ファイ建築研究所に改名。

主な作品は、田崎美術館 (1986)、ヤマトイインターナショナル (1986)、梅田スカイビル (1993)、JR 京都駅 (1997)、札幌ドーム (2001) など。

また、主な著書に、1967 年『建築に何が可能か』(学芸書林)、1973~79 年『住居集合論 1~5』(編著、鹿島出版会)、1987 年『空間〈機能から様相へ〉』(岩波書店)、1987 年『集落への旅』(岩波新書)、1998 年『集落の教え 100』(彰国社)、2001 年『HiroshiHara』(共著、WILEY-ACADEMY)、2004 年『DISCRETE CITY』(TOTO 出版)、2009 年『YET』(TOTO 出版) がある。

今年で5年目となる神戸建築学ですが、今回の第37回神戸建築学には第1回神戸建築学にも登壇していただいた原広司氏にご講演していただきました。今回の講演は、今年の6月～7月にかけて大阪・梅田で行われた「HIROSHI HARA : WALLPAPERS—建築家・原広司による、2500年間の空間的思考をたどる写経—」の連続講演会の一つとしても行われました。同展覧会では、歴史上の2500年の空間概念を写経という独創的な手法で表現されており、その中で今回は、「マイクロデュレイション」というテーマで講演していただきました。

一般に、建築学における時間の概念ではS・ギーディオンが有名ですが、それでもなお時間の記述というものは難しいと原氏はおっしゃり、その中で原氏自身は「マイクロデュレイション」という概念の提案を試み、場面の設定など様々な想定を要する建築設計やプレゼンテーションをより容易にする可能性について語られました。

まずはじめにスライドに映し出されたのは、原氏自身が作成した歴史上の人物や出来事をプロットした紀元前から現代にいたる2500年の年表でした。原氏はこの年表から写経を着想し、『法華經』や鴨長明の『方丈記』、アリストテレスの『形而上学』などの写経を行い、つづくスライドには、その写経とある風景を取り取った写真を色彩などから領域分割したものとを重ね合わせた色鮮やかなwallpaperが映し出されました。

つぎつぎとwallpaperが映し出されていく中、『千夜一夜物語(アラビアンナイト)』についての話の中で、マイクロデュレイションについての説明が始まります。原氏はまず、『千夜一夜物語』や

音楽家ジョン・ケージの『4'33"』を用いて、時間の流れの中にあら一瞬の時間を数式化できることを示されました。

これを建築に適用するにはどうしたらいいのだろうか。原氏は、建築を「ものとしての建築」ではなく、「出来事としての建築」として捉えることを考えます。人の流れをベクトル場で表現すると、人が集合して離散するまでのフェーズが考えられ、この考えを設計に用いられたのが、自身の作品である「札幌ドーム」や「京都駅」であると説明し、そのほかにも、建築における時間のデザインを試みた過去のプロジェクトが紹介されました。原氏は、建築を空間の表現として捉えるだけでなく、その空間を経験する人々の時間の意識、これを具体化させようとしているというのを感じました。

最後に、この講演の中で最も印象に残った言葉があります。「建築とはすべての人が経験するためのものである」という言葉です。この言葉には「ものとしての建築」の価値を越えた「出来事としての建築」の価値があるように思いました。日々の出来事、人々の行為やふるまいなどの時間の断片に付き添うかたちで建築は存在しなければならないというメッセージがこの「マイクロデュレイション」に込められているのではと思いました。私たちが学校で行う設計演習では、図面に線を描き、空間を形づくりしていくが、そこでは「この空間がどのように使われるのかいいのか」と考えていました。今回の講演を聞いて、それが「この空間がどのように使われてきて、どのように使われていくのがいいのか」という考え方方に変わった気がした講演会でした。(神崎拓也)



[担当学生]

M1: 李清揚（リーダー）、青尾麻里子、神崎拓也、肖培林、山田菜摘
B4: 後藤沙羅
B3: 川添浩輝、小林諒、高橋香、田川美那海、田中理貴
B2: 佐藤拓巳、山田夏穂
B1: 上田実香、川端梨紗子、竹本奈央、松井優香

神戸建築学 第 38 回
「CHIKEI」

團 紀彦

建築家・神戸大学客員教授



團 紀彦 | Norihiko Dan

建築家、神戸大学客員教授。

1956 年神奈川県生まれ。1979 年東京大学工学部建築学科卒業、同大学院で槇文彦に師事。1984 年米国イェール大学建築学部大学院卒業。1986 年團紀彦建築設計事務所設立。

日本橋室町東地区のマスター・アーキテクトとして街区再生型都市計画を実践するなど内外の計画で国際的に注目される。代表作として台北桃園国際空港第一ターミナル再生計画、日月日月潭風景管理処および表参道 keyaki ビルなど。

2012 年、2014 年臺灣建築賞首賞、2014 年日本都市計画学会計画設計賞受賞。

2012 年より神戸大学客員教授。

第38回は神戸大学客員教授でもある團紀彦先生に、「CHIKEI」をテーマに、ご自身の代表作の紹介を交えながらご講演していただきました。建築に欠かせない対話の相手である「CHIKEI」との関係をきっかけに、様々な次元から、共生ということを考えさせられる内容であったように思います。

まず、「CHIKEI」を表した、紙をくしゃっと折り曲げた、印象的な写真が映し出されました。2つとして同じものはない、地球の指紋のようなものである地形。地形と建築は、それぞれ豊かな歴史を持つのに、その関わり方は固定概念に縛られている。そのような問題提起から講演は始まります。前半は、團先生の作品ではなく、中国の山岳地帯を歩いた時のことや、窯洞（やおとん）集落やカッパドキアを例にして、自然地形の多様さと魅力、自然地形と建築の様々な関わり方を示した内容でした。参加者の固定概念を打ち破る、そういう構成で、講演のテーマである「CHIKEI」の魅力に、会場全体が引き込まれていきました。

続いて、團先生の代表作である「スプリングひよし」「京都アクリーナ」「日月潭風景管理処」などを例に、地形との関係に視点を置いて紹介していただきました。そこで、共通して團先生の作品は、外からの様々な要素との関わりによって作られていることを強く感じました。近景と遠景、土木建造物に対する建築、地形との一体化、風景を切り取る、アーティストとのコラボレーション、これらのキーワードからもその手法が伺えます。建築とは、建築家と様々な状況との間の異種交配によって生み出されるものである。そこに多様性のある”場”(locus)が抽出される可能性が秘められており、建築家は、文化の異種交配という役割を持つ。このような團先生のお考えが具体的にどのように建築に結び

ついているのかを感じ取ることができたように思います。外の要素との関わりから生み出される魅力の存在は、私自身強く感じている部分であり、強く共感する内容がありました。

最後に、再び話は時代を遡ります。ノリの「地と図」やコーリン・ロウの敷地に対してかたいものとやわらかいものをプランの中に共存させる手法について触れ、建築のボキャブラリーを増やすことの重要性についてお話をされました。そこで團先生の持論として、固体、気体、に対して液体という発想が建築には少ないのではないかという疑問を投げかけられました。液体というのは、地形をはじめとする他の要素に柔軟に対応し、一体となることのできる要素を指します。このような発想にも、外部からの要因に対する共存のあり方を模索する一面が現れていたように思います。そして、團先生の修士論文の内容として、「同化・分離・調停」という3つ共生の仕方を示し、社会・文化・自然環境など、様々な要素がパッチワーク状に存在する世界において、共生の仕方を考えることが、アーバンデザインや建築において求められるテーマであるとして本講演をまとめられました。

設計課題においても敷地調査が重要であることを学び、社会問題を始め、外部の要因と建築の関わりが重要であることを学んできました。そのプロセスはどこか受動的な面が存在するようにも感じてきました。しかし、そうではなく、様々な要素との出会いに魅力があり、受身であってもポジティブに共生の仕方を模索することにこそ建築の醍醐味がある。「CHIKEI」というテーマを通じて、そのようなことを感じさせられる、刺激的な講演であったように思います。（岡田朋大）



[担当学生]

M1: 岡田朋大（リーダー）、森井夏樹、森田久也、合田宏明、森川潤、吉岡明剛
B4: 後藤 沙羅
B3: 川添浩輝、小林諒、田川美那海、田中理貴
B2: 佐藤拓巳、山田夏穂
B1: 上田実香、竹本奈央、松井優香